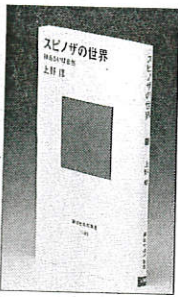


ニューズの本棚

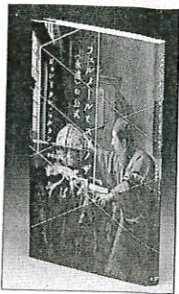
本社編集委員
鈴木 繁



マシュー・ステュアート著
『宮廷人と異端者』（書肆心水・3990円）



上野修著『スピノザの世界』（講談社現代新書・756円）



ジャン・クロ・マルタン著
『フェルメールとスピノザ』
（文芸社・1890円）

危機に強いぞ 高潔な異物

■スピノザが来た

哲学史の異物。難解かつ分類不可能。そんな17世紀の思想家スピノザの潮がひたひたと満ちて来ている。昨年はその名のついた本が次々と刊行された。

バルフ・デ・スピノザは1632年、ポルトガル出身のユダヤ商人の息子として、チューリップバブル直前のアムステルダムで生まれた。ヘブライ語の研究で才を見せるも、23歳の時「あらゆる呪詛が、彼の頭上から下らんことを」と宣言され、ユダヤ教会を破門される。

居を変え、独学で思索を深めて63年に『デカルトの哲学論理』、70年『神学・政治論』を出版する。ところが今度はキリスト教会から「冒瀆的」と難じられ、神の定義から展開する主

著『エチカ』の出版は、77年の没後まで出来なかった。

その神は、ただただ無限で永遠な存在。顔も慈愛もなかった。経済と科学の先進国だった当時のオランダさえ「スピノザ的」は侮辱の表現となった。

我思いつつあり

昨年秋に出た『宮廷人と異端者』には同時代の大知識人ライプニッツがスピノザの思想に強烈にひかれつつ、世情をおもんばかって真意を隠すさまが生々しく描かれている。デカルトの信奉者たちもまた「正統性」を主張するため攻撃に回った。

國分功一郎『スピノザの方法』（みすず書房・5670円）は、近代哲学の祖デカルトと対比して論じた意欲作。

「我思う、故に我あり」——デカルトの方法は、どんな愚者にも疑いえない「私」の認識から出発する。精神と肉体を分けるその方法論は、科学の発展を支え、近代文明を加速した。

「我思いつつあり」——スピノザは精神と肉体を分けない。彼の哲学では、方法はたとえと同時に出来る道。それは自分の中にある。「誰も自分で考え、その道を見つめるしかない」と國分さんはいう。現代人には、のみ込みにくい方法でもある。

A・ネグリが『スピノザとわたしたち』（水声社・2625円）で語る「道」は、ザクッと分かりやすい。いよいよ目に見えるものとなった近代の危機を

克服すべく新造する道だ。それはマルチチユード（多数者の力能が「共」を構成することで、「愛」へと至る。

05年刊行の新書、上野修『スピノザの世界』は6刷まで版を重ねた。上野さんはネグリと異なり、スピノザの突出したアンチヒューマニズムぶりに注目する。「人間を、神の力のローカルかつ必然的であり方、と規定したところが面白い」

神から人間臭さをはぎ取って、ニーチェやマルクスに影響を与え、人間の本质に「衝動」や「欲望」を見て、フロイトに先んじたことは間違いない。独ロマン派からは「神に酔える神祕家」（ノヴァリス）と、妙な褒められ方をしている。

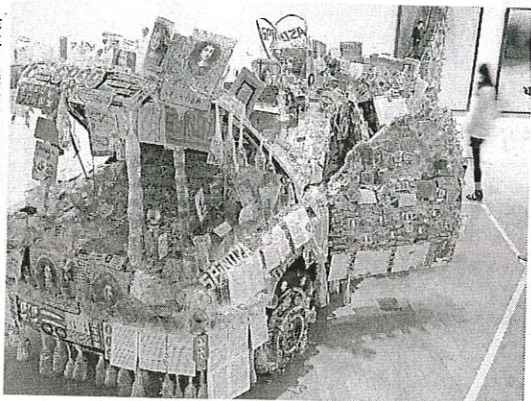
つましい暮らし

底知れぬ哲学の主は、高潔なひととなりが伝えられ、つましい暮らしをレンズ磨きで支えたと言われる。近年、レンズと原始的な撮影装置を介して、画家フェルメールとの交流の可能性が取りざたされてきた。昨年暮れに出た『フェルメールとスピノザ』の著者は、「天文学者」として描かれた人物をスピノザと重ね合わせている。

一方、振り子実験で知られたホイヘンスとの交流を想定するのは安富歩『経済学の船出』（NTT出版・2520円）

だ。現代の決定論的カオスを取り入れ、「共」を超える「非線形のエチカ」を構想する。

みんな大胆で積極的だ。これもスピノザの効果か。能動上等。喜び重視。究極のポジティブ思考の人でもあった。



昨年、森美術館で開催された「フレンド・ウィンドウ展」で話題となった「ヒルシヨホンの「スピノザ・カ」」
©ADAGP, Paris&SPDA, Tokyo, 2011

2012.
1/29 (日)
『朝日新聞』朝刊